

馬の角膜炎について

門別診療所 ^{とみ} ^{かし} ^{ゆう} ^{ぞう}
富 樫 雄 三

この場をお借りしてみなさまにご挨拶申し上げます。平成29年3月に大阪府立大学獣医学科を卒業し、4月より門別診療所で勤務しております富樫（とみかし）と申します。大学の授業で馬に興味を持ち、生産地にやってみりました。まだまだ分からないところも多いですが、早く一人前となれるよう精進してまいります。どうぞよろしくお願いたします。

馬は群れで生活する、また頭をよく動かすため、眼付近のケガはしばしば起こり、眼球の最も外側である角膜も一緒に傷がつくことがあります。また、眼の付近を牧柵などにぶつけてしまい角膜が腫れ、その不快感から顔を壁などに擦りつけて角膜を傷つけることも考えられます。角膜が傷ついたサインはまぶたの傷、まぶたがピクピク動く、眼の中が青白い（図1）、馬が痛がる、眼をしょぼしょぼさせる、まぶしそうにしている、涙や眼ヤニが多いことが挙げられます。

角膜の傷を放っておくと、角膜を形作るタンパク質が分解され、急速にその構造が壊れて角膜に穴が開いてしまいます。この角膜の破壊は細菌やカビの感染によりさらに早く進みます。角膜に穴が開くと最悪の場合は失明します。上記の症状により角膜の傷が凝われる場合、フルオレセインという薬を用い、図2のように傷ついた場所を緑色に染めることで診断します。

治療の方法は初診時の症状により大きく変わり、角膜の傷が浅い場合は点眼や注射で治療し

ます。処方するのは感染を排除あるいは予防するための抗生剤（オフロキサシンなど）、角膜の破壊を防ぐ抗タンパク分解酵素（自家血清やアセチルシステインなど）です。これらの点眼薬はなるだけ頻繁に（2～6時間に一度）点眼するのがよいとされており、重症の場合は持続点眼を留置するのが望ましいです。角膜の破壊が進行していると結膜フラップ術、羊膜移植などの外科的処置が必要になります。

予後は角膜の傷ついた原因、傷の深さや場所、治療開始までの時間により決まります。角膜炎はなるだけ早く処置を開始する必要がありますので、眼の周りについてよく観察していただくことをお勧めいたします。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

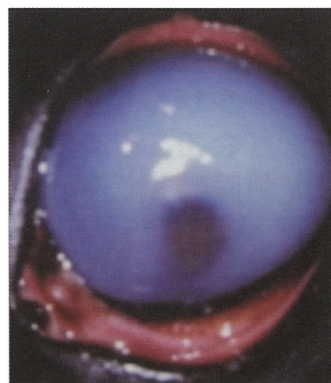


図1 角膜の腫れ（浮腫）

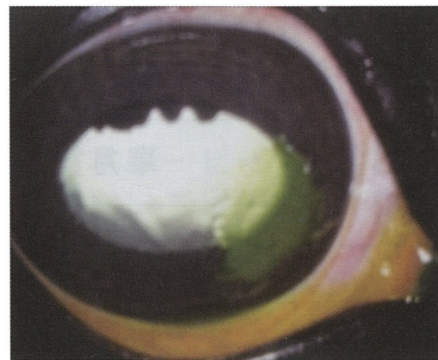


図2 フルオレセインによる傷の染色
【図は馬臨床学（緑書房）より引用】